



## 基調講演

### 演題：「希望への道筋をみんなで探していこう」

前軍縮会議日本政府代表部特命全権大使

猪口 邦子 上智大学法学部教授



今回はこのように大変重要で熱心な会場にお招きいただきありがとうございます。すばらしい開会式でしたね。皆さんの気持ちがひとつになって、大きな希望がそこから生まれるような、そしてここ新旭町が世界の中心になっていくような、そんな感じがしました。やはり、意欲あるところが物事を変えていく中心となるのだと思います。グローバル化（国際化）の時代にいろいろなことが地球上で起こっています。いろいろな取り組みがなされています。何がその基点となってくるのかと考えると、ローカルなところのエネルギーなのでしょう。それを感じました。

それから昨年2月、やはりこの会場でみなさんと「全国子どもサミット」をやったわけですが、運動をしていくこと、「継続性」というのが重要ですね。だから、私は必ずこの会場に帰って来ようと思って、海東町長ともその後何度かいろいろな場面で一緒に、そしてやはり帰ってきました。続けていこうと思ったら、それぞれの人が自分で行動することが重要だと思います。

今日私は、海外からおいでくださったマイン・サバイバー（地雷のサバイバー）のみなさんに心から敬意を表したいと思います。本当に大きな生きる力を、私たち全体に与えてくれたと思います。私たちは「地雷をなくそう」という運動をする時に、被害に合った方々を助けようと思っているわけです。でも本当はどちらが助けられたのでしょうか。マイン・サバイバーのみなさんの、その力強い生き方、その努力、希望への道筋をしっかりと示していくような姿勢、それによって私たちは助けられていると思うのです。外交でも、国際舞台でもよく感じるのは、自分は人を助けるためにやっているのだと思っているのですが、実際は自分がみんなによって助けられているのだということです。私たちの行っているこの地雷廃棄運動とはそういうものだと思うのです。

それから、海東町長はリーダーシップを発揮して、国際的にこの町が声をあげているのだ、しかも子どもたちが一緒になってやっていくのだということを伝えておられます。昨年9月、オタワ条約締約国会議がバンコクでありました。これはアジアで開催された初めての締約国会議だったのですが、海東町長は通訳もつけずに立派に演説をされ、そしてこの町としての取り組みを説明されました。その最後のところで会場がシーンとなって聞いていたことがありました。それは、「今度、世界子どもサミットを自分の町でやるのでみなさん来てください。」という呼びかけです。国際会議の場で、ローカルにやることについてしっかりと報告し、そして更に今後の取り組みに全世界を招き入れるという、そういう自治体のダイナミックなやり方について、私の隣で演説されました。当時軍縮大使をしていた私はそれを聞いて、日本社会のさまざまなセクターでダイナミックな、力強いものが新しくうまれてきているんだなと感じました。ですから、みなさんはここがそういう町だということに誇りに思ってください。私は心からそのことに敬意を表したいと思います。立派な町としての取り組みで、全世界をこの町のなかに取り入れて、そしてそこで学んでいくという心構えですね。非常に模範的だと思います。それが国際舞台にも配信されていくということですから、世界子どもサミットで啓発される、そういうやり方も可能なのだということです。しかも、子どもを中心に次代への取り組みを企画するということが可能なのです。ですから、みなさんがやっていることが、やがて11月のオタワ条約のイベント会議で発表されるという事も期待できます。国際的なところに、報告（レポートバック）することが重要だと思います。そこから、他の国の人たちが学ぶのです。

ここで、私の自己紹介をしたいと思います。私は2年間、ジュネーブで軍縮大使をしたのですが、それまで

の間ずっと国際政治学を大学で研究、教育していました。今日も上智大学で国際政治学を教えています。もし、講義の内容に関心があれば、公式サイトを開設していて、全ての授業内容を公開していますので、アクセスしてみてください。

軍縮大使としての私の心構えは、「日本は唯一の被爆国であり、そして軍縮不拡散に積極的な取り組みをしてきた国なのだから、リーダーシップを発揮する責任がある」ということでした。私の仕事は多国間で、全世界的な規模で取り組みをしていくところでの大使です。そういうところで、日本がどうやってリーダーシップを発揮するのかと考えた時に、最終的に至った答えが、「国際的なルールを作ることについてのリーダーになる」ということです。一番いいやり方が、あるいは最も効率的なやり方が、協議体の議長になるということで、私は二年間でしたが、3つの多国間の軍縮の協議体の議長を務めました。

1つは先ほど紹介されたように、軍縮会議そのものの議長を務めました。今までの核軍縮条約というのは、実験の禁止であるとか、配備の規制という性格をもっていたのですが、次の世代の核軍縮というのは核兵器そのものの生産禁止、つまり核兵器の原材料の生産禁止です。これをカットオフ条約 (Fissile Material Cut-off Treaty) といいます。そういう条約に向けての交渉開始、交渉することの政治行為をつくる、そういうことをやったわけです。

それから、もう1つは、核兵器は大量破壊兵器ですが、実際に多くの方が犠牲を被っているのは、地雷や小型武器といった通常兵器の分野ですから、ここにおいて取り組みを進めなければならないということがあります。そこで、小型兵器の非合法な取引の完全禁止を実施するための国連の会議が2003年にありましたが、そこでも議長をやりました。

もう1つは地雷分野で、オタワ条約の地雷除去常設委員会の共同議長です。このオタワ条約は、必ず被害国と、被害を受けてはいないけれども積極的に解決への支援を提供しようという国がセットで議長をやりますので、私はカンボジアと共同で議長をしていました。今も日本が議長国ですから、後任の大使がそれを引き継いでおられます。

ですから、軍縮大使としては、やはり世界で日本がどういうふうにして新しい取り決めをし、そして実施に向け中心的な役割を果たすことができるかということを中心に考えてきました。その中で改めて思うことは、国連やジュネーブの大きな会議場で新しい取り決めについて大きな議論をし、方針を示し、それを全会一致で全世界が納得するような形で着地させるということです。その仕事に心血を注ぎました。そのような先進国の立派な会議場でなされる会議がどのように具体的な人間の生活において変化をもたらすことができるのかを考えてみた場合、グローバルなものとローカルなことがセットにならないといけません。

具体的なすべての取り決めはローカルなところでしかなされていないし、そうでなければ意味がないということです。ですからグローバル化の中で、国際的な広範囲の取り決めがなされる時代だからこそ、一層ローカルなところで自分の問題としてきちんと取り組んでいくということが重要だと思います。どこか世界の遠い所で、政府の代表たちがやっているというのではなく、「そのテーマは自分の問題である」と考えることです。今日開会式を見て、みなさんが大変立派な報告ビデオを作ってくれましたが、まさに「日本の子どもたちが次の世代として、この問題を自分のものとしてとらえ、取り組んでいる」ということを、大変心強く思いました。

私がいつも思い出すのは被害国のことです。あるいは被害者の演じる役割のあまりに大きな事です。今日のサミットでは、「イマジネーション (想像)」と「キャパシティー・ビルディング (能力向上)」をテーマにされるようですが、まさにこの2つがキーワードです。人間の想像 (イマジネーション) する能力はなぜこんなに乏しいのか。人は具体的な事からでしか発想できない。具体的に自分が経験したことを越えることがなかなかできないのです。自分が経験したことだけにあまりにもこだわっていて、経験していないことについてのイマジネーションが不足しているのです。ところが、その人間のイマジネーションの乏しさを補う方法があるのです。どういう方法で補うのでしょうか。実は教育がそれだと思えます。

私は長い間、教育の現場にいるわけですが、教育の場では最終的に、自分が経験していなくても、何か考えて分かるようになるのです。ですから、教育の機会は重要で、教育を通して経験していないけれどもイマジネ

ーションを十分広くもって、より多くの世界の問題に思いを馳せることができるのです。

それから、こういうメディアやイベントによって皆さんは考えを深めることと、イマジネーションを膨らませることができると思います。でも、最も私たちのイマジネーションの乏しさ（ブワネス）を補って助けてくれるのは、やはり被害国の声なのです。地雷の運動の中では、“Raise the Voice”（声をあげよう）というのが大きなキャンペーンになっていました。「自分の大変な状態について説明をする、しかもそれを海外でやるというのはどんなにか大変でしょう。しかし、声をあげてください。」と。今日は、たくさんのマイン・サバイバーのみなさんがこんな遠方にまで駆けつけてくださいました。私たちはどんなことよりも、マイン・サバイバーのみなさんの生きる姿を見て、その声を聞くことによって自分たちの本質的な能力のなさを打破することができます。そして、そういう問題について様々な役割の中で、積極的な貢献ができる人になっていくだろうと思います。

私は先回、皆さんにお話した時に、「1分も無駄にしないで自分の時間を大事に勉強して、世界の人に役立てるだけのキャパシティー・ビルディングをやってね。」とお願いしました。約束は果たしてくれていますか。遅すぎることはないのですから、ぜひ自分の能力を高めてください。それによって、人を助けることができます。マイン・サバイバーのみなさんには、どんなに大変でも、どうか私たちの能力のなさを補ってください。私たちが考える事ができるように、自分が経験していないけれども、十分にイマジネーションをもって、問題の深さを認識できるように助けてもらいたいと思います。どういう活動よりも、そこが私たちの原点になり、私たちの考える力を触発してくれるのだと思います。

では、イマジネーションができるようになった時に、どういうふうにも人を助ける行動に出ることができるのか。1つには今申し上げたように、自分の「キャパシティー・ビルディング」をしなければならない。特にみなさんの年齢ではあらゆることを多く吸収して、自分の能力を高めてください。この間は英語をちゃんと勉強できなければだめですよと言いました。世界でコミュニケーションをする時にやはり英語は便利な言語ですから、そこをがんばる必要があります。その他、中国語、フランス語など多くの人が使っている言葉についても、努力することができれば本当はすばらしいことです。自分の国の言葉だけでなく、いくつかの言葉を知っていれば、文化の間を越境することができる。初めて知る世界がそこに開けるから、若いみなさんにはぜひ語学を勉強してほしいと思います。その一方で、日本語で言えないことは英語で言えるはずがありません。ですから、日本語で自分の考えていることを論理立てて説明する能力というのが根本になるのです。そこにも心血を注いでください。そして様々な知識、全般的なネットワークを作っていく能力、そういうことを磨いてもらいたいと思います。

このような世界こどもサミットを計画し、実行する中で飛躍的にこのような能力が高まったと思います。皆さんはもうそのノーハウ（やり方）が解ったのですから、人生のいろいろな局面で、このように大きな会合というのはどのようにやったらうまくいくのか、落とし穴はどこいう所にあるのか、気をつけなければならない所はどこか、そういうことを他の人に知らせる、コミュニケーター（伝達者）としての役割を担っていくのだと思います。

ところで、人を助けるという時、何が本当にポイントなのだろうと考えたことがありますか。助ける時に一番の問題となるのは一体何だろうということ。例えば、貧しい人には食料を与える、地雷の被害にあった人に支援をする、病気の人には医薬品を与える、そういうことが直接的には重要でしょう。しかし、もっと深く考えた時、私が至った1つの結論があります。それは「ネットワークに接続していく」ということです。これは国連の場でも活発に議論されたことです。大きな問題というのはネットワークから外れてしまっている時に起こり、そこには大きな、剥奪感が出てくるのではないかと思います。例えば貧困についてこんなことが書かれています。「貧しさとはどういうことか、貧しさとはいかなるネットワークにも属さないことだ」と。例えば外国の方、子ども、赤ちゃん、といった人はネットワークに接続されるチャンスが少ない、あるいは全くネットワークから外れてしまっていることがあります。かつて貧困とは、「所有」していないということの意味、所得のカテゴリーとして定義されていました。しかし、将来的に貧困という問題、あるいは剥奪という問題を考えると、それは「何かに属していない」、「ネットワークから排除されている」という考えになります。です

から、私たちが人の助けになりたいと思うとき、何かを差し上げるということが最初には必要かもしれないですが、もっと深く哲学的なところまで考えると、「ネットワークに接続してあげる」という努力が重要です。

では、どういうことに接続してあげるのか。「ネットワークに接続するというのは、何に接続するのか。」ということですが、1つは「情報」に接続してあげることです。情報がないところから貧困は始まります。情報過疎の中に陥ってしまって、ネットワークからフックが外れてしまう、そこを情報に接することができるように助けてあげるのです。2番目は、「人」に接続してあげることです。人との出会い、人間関係への接続です。それから3つ目は「オポチュニティー（機会）」、いろいろな機会に接続してあげるということ。例えばこういうイベントに来る、いろいろな本を読む、人と出会って大きな議論をする、いろいろな機会が私たちにはあります。そういう機会に接続してあげるということが、もっとも根本的なところではないでしょうか。貧困も剥奪も抑圧もそして戦争も紛争も実はこの3つのネットワークとの接続が外れたところから一番起こりやすいし、誰も気づかない中で、大きな苦しみとなってしまおうというのです。

世界の様々な問題をイマジンすることが被害者の助けによっては可能となった。そして私たちがそれぞれ大きな努力を注いで、能力を高めることができ、更にどういうふうにするのかという時には、みなさんを接続してあげる。そういうふうにして、私は軍縮大使としていろいろな試みをしました。例えば、多国間協議で交渉している時に多数決で物事を進めれば、それに賛成しない人はその内容について、もはや強い思いを満たしてくれなくなる。そこで一番難しいけれども、全会一致で物事を取り決めていく。全ての人がこの議場に接続されているし、自分たちと何かリンケージ（つながり）があると感じてもらえる。そういう結論を出すということにこだわった方法論をとりました。

先程、私がどういう分野で仕事をしたかをお話しましたが、今度は私が使った方法論の話をして。「マルチラテラリズム（多国間主義）」の場合において、最も方法論として難しい、全員を含めていくということ、つまり全会一致主義といって、一国もとり残さない、最後の一国が反対すれば何も採決しないというやり方です。その迫力をもって全員がそれぞれの国のそれぞれの問題について、議長に正直に話をし、議長はそれを調整し、最後には様々な国が妥協的な精神を発揮してくれて一国も反旗を翻さず、またどの国も押し切られずに済ませる。そういう議事運営を心がけていました。先程言った小型武器についても、軍縮会議についてもそうしました。オタワ条約は加盟国が少ないのですが、もちろん加盟国の中においてはそのような方法論が心がけられています。

さて、今軍縮の話にきましたので、世界での取り決めがどうなっているのかを、せっかくの機会ですので、少し説明したいと思います。やや専門的になるかもしれませんが、いつかどこかでそういう話をきちんと聞いたという事が役に立つかもしれません。まず、兵器の分野です。兵器には先程言ったように大量破壊兵器と通常兵器というのがあります。大量破壊兵器には、3つあります。核兵器、生物兵器、化学兵器です。これらは、一度に何千人も亡くなってしまうことから、大量破壊兵器と呼ばれています。しかし、最近では、結果的に大量の死者を出すようになる通常兵器もありますから、兵器の範疇の境界線というのがだんだんはっきりなくなってきています。核兵器、生物兵器、化学兵器には、それぞれに全面禁止条約、及び軍縮不拡散するという条約があります。核兵器にはNPT（不拡散条約）が、生物兵器と化学兵器は完全禁止条約があります。

それから、もう1つの兵器が通常兵器です。通常兵器の中には小型武器や地雷があります。私たちが取り組んでいる地雷というのは全体像の中ではここに位置づけられます。世界で最も大きな犠牲が出ているのは実はこの通常兵器の分野で、小型武器の場合年間40万人の犠牲がでています。地雷については条約の取り組みがありますので、少なくなりました。これは条約があるということがいかに重要かということを示しているわけです。何万人も人が亡くなっていたのが、先程の報告にあった、1万数千人にまで減ったということであれば、オタワ条約の成果があったということになります。一方、小型武器の取り組みは大幅に遅れていて、条約がないのです。条約がない場合は政治的な拘束というかたちをとります。

国際的に協議をすると国際文書（International Instrument）というものに合意します。これによって全ての国際ルールが決まります。国際文書には二つの種類があります。1つは「政治的拘束力（Politically Binding）」のあるもの。もう1つは、「法的拘束力（Legally Binding）」のあるものです。オタワ条約は後者になります。

法的拘束力のある文書は、実施しなければ国家責任が問われることとなります。だから実施が一気に進み、被害者を減らすことができます。政治的拘束力のある文書は、行動計画と呼ばれ小型兵器分野にはこれがあります。小型武器のような行動計画しかない場合においては、各国政府が実施に向けて百倍努力しなければならないし、その約束が守れない国があれば、その国を支援しなければなりません。ただ、小型武器の行動計画の場合は、国連加盟国が全会一致で採択し、実施態度も全会一致で私が起草した議長統括を添付した報告書を採択したわけです。

オタワ条約の場合には「普遍化 (Universalization) の問題」というのがあります。つまり、入っていない国があるということです。未だに地雷を生産して流通している国があるということで、いかにたくさんの国を普遍化の波の中に入れるか、つまりオタワ条約に参加してもらうようにするかというのが、世界的な大きな課題です。日本はこの普遍化推進の政府としても大きなリーダーシップを発揮しています。

この2つの種類の国際文書があるから、法的拘束力を持たせるのが無理な時は、政治的拘束力のある文書を全会一致で採択できれば相当いいということになります。外交的にはそういう努力をします。そして、うまく合意が成立して成熟してきたら、これを法的拘束力のあるものに格上げしていくというやり方をとるのです。

みなさんもぜひこういうことを交渉するだけの能力を磨いてください。軍縮の分野ではそれぞれの国が兵器を扱って、それが国家の様々な政治権力及び安全保障の考えに反映されますので、交渉では簡単には相手はゆずってくれないですが、それを説得して、相手のロジック (論理) に立って物事を考えてあげて、ついには納得してもらうだけの能力を、若い時から磨いていくことができれば本当に素晴らしいと思います。私の世代だったらみなさんの歳ぐらいの時にはそういうことを思う人は到底いなかったのではないかと思います。みなさんの先生方、保護者の世代の人たちには、かつてやりたくても実行できなくて悔やんでいることがあるでしょう。そうした話がついつい家庭の中や、学校の廊下で出てしまう。みなさんの世代はそれに触発されているわけです。だから、みなさんが最初の世代です。その年齢から、いつか世界で犠牲が一人でもなくなるように、交渉をしていくのだという決意をもって今からキャパシティー・ビルディング、自分の能力を上げていくことに挑んでもらいたいと思います。

さて、ある条約が成立した、あるいは行動計画が採択されたとすると、その後にはプロセス (過程) というのがあります。条約にサインをして発効して、それでおしまいということではありません。プロセスには簡単に説明すると、「運用検討会議」というのがあります。これは5年に一度開催されます。オタワ条約だと、発効した5年後の今年11月に開催されるオタワ条約第1回運用検討会議 (Review Conference) になります。5年に1回のこの条約の見直しの会議では、条約そのものの内容について改変できるのです。そういう意味で非常に緊張ある会議となります。では、5年ごとの間はどうなるのかということ「締約国会議」というのを毎年、もしくは隔年でやったりしています。オタワ条約の場合は今までのところ毎年行っています。先程、海東町長が演説されたと言ったバンコクでの会議は、毎年ある「締約国会議」です。オタワ条約の中でもこの締約国会議を、毎年やるのか、あるいは隔年でいいのではないかという議論が出てきています。11月の会議ではそんなところに注目したらいいと思います。この締約国会議がどういう役割を果たしているのかということ、何かに合意して世界各地で実施が始まったあと、それが実際実行されているのかについて報告をします。このレポート (報告) 機能を十分に果たすことが重要なのです。例えば自分が独学で勉強して、そのことについて言葉で「ここまでできました。」とクラスで報告する機会が5分でもあれば、一層がんばって勉強するでしょう。だから報告する機会というのは自分にとっての動機付けにもなるし、締め切り効果もあるのです。「ああ、あの日に会議があるから、それまでに実行しないと国としては恥ずかしいぞ。」ということになります。ですから、このオタワ条約のもとで、最初の検討会議までの間毎年締約国会議があったということは、毎年毎年取り組みが国際社会でチェックされるし、自分としても報告しなければなりませんから、取り組みを加速させるという効果があります。大きな会議で互いがどんな取り組みをしたかを報告しあうわけです。これを“Share the Experience (経験の共有)”と言います。いろいろな取り組みをして失敗した国もある、うまくいった国もある。その中でうまくいった取り組みのことを“Best Practice (ベスト・プラクティス)”と言います。日本語で、「最善の策、一番うまく行った事例」ということです。例えば非常に莫大なところを地雷除去しよう

としている、危ないところは、フェンスを張ったり、マークをしたりして、子どもが近寄らないようにしました。ところが、子どもたちはその標識が読めず、そこに入ってしまうとどうなるかわからないで被害にあう。そういう経験をしているとするならば、どういうふうになれば地雷を除去するまでの間、そのような被害を出さずに済むベスト・プラクティスになるかという、知識を提供するのです。

それから、“Lessons Learned (レッスンズ・ラウンド)” というのは、「教訓」という意味ですが、失敗例をみんなで披露して、「こういうふうにしたけど失敗して被害を出してしまった、他の国では失敗をしないように自分が今からこれを説明するから、これと同じことをやったらだめだぞ。」といった説明の仕方をする。こういうふうには締約国会議では、自分の経験からいろいろな情報や、やり方を共有したり、一番いい方法を示したり、自分の教訓をみんなに伝えたりして、他の国に便宜を図ってあげます。

このようにして条約のプロセスは動いています。調印して、そして十分な発効要件が整うと条約は発効します。発効したらそれから5年後おきに運用検討会議があり、その間締約国会議があって、毎年の取り組みが報告されていく。そういう大きな流れの中にみなさんの行動があるわけです。みなさんのこういう地元でのローカルな取り組みが、何らかの形でオタワ条約の運用検討会議、あるいは締約国会議において報告されることになると思います。その報告が他の国にも影響を与えるという流れです。

さて、私が心がけたマルチラテラリズム（多国間主義）というのは、世界の中心的な流れになっていくと感じます。例えば冷戦期において、米ソが対立していましたが、大きな二カ国が対立すると、大抵のことはその間で交渉されていました。二カ国間条約が軍縮条約についても多かったわけです。ところが、冷戦が終わると世界各地でいろいろな問題があることに気づくわけです。二カ国間で何か取り決めても、他のところで同じような問題が山積していれば、解決にならないということがわかってきます。また、冷戦が終わってからは、グローバルゼーション（国際化）が進みますので、世界が一つの村みたいなものになってきます。取敢えず自分のところには関係がないと思っても、何らかの影響を必ず受けるようになる。そうすると、二国間で取り決める、あるいは自分の小さな仲間だけで取り決めるよりも、多国間できちんとルールを作っていくという動きになってきます。マルチラテラリズムという方向性が軍縮の分野を中心に打ち出されてきていると思います。そして今、日本はその中心的な役割を果たしているのだということを誇りに思ってもらいたいと思います。これは、当然のことです。日本は唯一の被爆国ですから、日本が軍縮不拡散の分野で大きな役割を果たすことを、世界は求めています。経済大国は世界中にたくさんありますが、軍縮を推進できる責任ある大きな経済大国、大きな推進国は日本でしょう。日本がやらなければ誰がやるのかという感じをもつことが重要だと思います。

原爆の被爆国ということでは、日本がまず被害国です。私たちはそれぞれサバイバーなのです。今生きて、この時代をこういうふうに作ることが出来ている人たちは、大量破壊兵器のサバイバーなのです。だから、私たちは声をあげていく、その声のあげ方にもいろいろあります。そのことを考えて、そして次の時代のリーダーになるのだというのもサバイバーの生き方です。マイン・サバイバーのみなさんにぜひお願いしたいのは、「次の世代のリーダーになってほしい。サバイバーこそがリーダーになれるのだ。」ということです。日本は自らがサバイバーですから、世界に軍縮のリーダーとしての迫力をもった努力をすることによって、サバイバーというのは、生き残った時にどういうふうの世界に貢献するのかということを示していることになります。

軍縮大使として、ずっと考えて一日もその脳裏を離れなかったことが、今お伝えしたようなことです。世界は広く課題が多いから、やるのが難しいけれど、そこで先程も言った連続性というのが重要です。一つの世代では到底出来ない、ましてや一人では出来ない、一人の大使でも出来ない。一つの時代でも出来ない、一人の室長でも出来ないし、一人の局長でも出来ない。それが、年々と続いて継承されていかなければならない。さらに、一人の世代でも出来ないとすれば、皆さんの世代に継承していかなければならないですから、やはりこうした思いというのを伝えなければならぬと思っています。

さてそれでは、能力を高めるためにはどうすればいいかというと、やはりがんばらなければいけませんね。最近では“Core Competence (コア・コンピタンス)” という表現を使っています。「コンピタンス」は「高い脳力」のことを言います。「コア」は「自分が核として持っている能力」のことです。一体自分が何において長けているのだろうか、そこを問わなければなりません。そこが、「コア・コンピタンス」で、例えばまずは自分

は新旭町一というものをもらって下さい。自分はこれなら友達一番だよと。そして次は滋賀県で一番になろうと  
思ってください。最近では“Super-competence (スーパー・コンピタンス)”という表現を使いますが、自  
分にとって「コア」な「コンピタンス」をさらに、圧倒的なものにして「スーパー・コンピタンス」を持って  
いくということです。つまり、サバイブした人たちは、やはりそういう責任をもってキャパシティーを高めて、  
役立っていくべきではないでしょうか。サバイバーとは私たち全員のことです。それぞれの分野で、どうい  
う能力が問われるかというのは違います。だから、それぞれの仕事について、その場で磨かなければならぬ  
能力もあります。でも、若い時からそれぞれの場面で自分の能力を磨く習慣がある人は、新たなチャレンジを  
受けた時にでも、やはりそういうふうにする努力が出来るのかもしれない。

私は長い間研究者で自分のペースで仕事に向かっていたので、実際の交渉において、失敗をしたらそれが歴  
史の結果となって大きな影響をもたらすという緊張感の中で仕事をしたことがありませんでした。現場に立っ  
たら、そこで能力を高めることもできます。ですから、能力を高めることはいつからでも、今日からでも始め  
る事ができると思います。

例えば議長をやることになれば、先ず国際法を熟知しなければなりません。会場ではいろいろな動議がださ  
れ、いろんな動きがあるので、議長はそこを裁定できなければいけませんし、もちろん条約については全部知  
っていなければなりません。ですからそこで様々な努力をします。オタワ条約の場合は相当長いから大変です  
が、条約を全部暗記するというのは非常にいい方法です。私たちは基本的には暗記している内容でコミュニケ  
ーションをとりますから、どうやって英語の勉強をしようかと思っている人は、読むのではなく、暗記する  
という努力を始めたらいいと思います。私は昔、朝起きたらピアノの練習をしていたことがあります。場面が  
変われば、内容が変わるだけで、子ども時代にやったことが一番効果的だったと思い出しました。そして、毎朝  
条約の暗誦をしていました。議場ではどこの大使よりも内容について知っていて、相手がファイルを見たりし  
ている間にもパッと答えを出してあげれば、心理的にも優越した立場で交渉を進めることができるのです。そ  
ういう全てのことを動員しながら、真剣勝負でやらなければ負けてしまう。これが国際社会ですから、皆さん  
も自分を磨くために何らかの努力をしていただければと思います。

皆さんは教育を受けており、識字能力もあり、進学の希望をもつことができますから、目の前にはまさに希  
望への道筋があります。ですから、そういう機会がなかった人たちのことを十分にイマジンを、自分の社会  
的な責任というものを早くから考えてください。その責任とは先ず、自分を大切にすることです。自分  
自身が生き延びて、そして自分の能力を高めていくということです。いつかそれが、必ず役立つと思います。  
一方、大人の責任としては、根本的には戦争をなくすというのが非常に重要なポイントだと思います。今日で  
は再発しない戦争の終わらせ方というのがどういうものかを考えなければなりません。

「戦争がなぜ繰り返されるのか」と聞かれたら、研究者として一つ明解な答えがあります。それは、「終わら  
せ方が悪い」からです。ではどういう終わらせ方をすれば戦争の再発を防ぐことができるのでしょうか。私は、  
単純に考えると二つの事が整うと戦争は再発されない、その国は永久平和に向かうと思います。それは、日本  
が身をもって示したことです。日本はその後戦争していないし、平和国家としての憲法をもっています。その  
二つとは、「軍縮」と「和解のプロセス (Reconciliation Process)」です。

まず「軍縮」はなぜか、軍縮は例えば地雷もそうですが、特に小型武器が自分の生活空間に蔓延している場  
合においては、非暴力的に問題を解決していくことがやり難いということです。人は暴力によって簡単に解決  
できるのではないかとこのころに流れていきやすいのです。では小型武器と地雷の共通点は何か。実はすご  
く大きな共通点があります。それは戦争が終わっても政府が完全には回収してくれてないということです。恐  
ろしいことに。大きな戦車や戦闘爆撃機は政府が回収するでしょう。でも、地雷は回収されていない。オタワ  
条約によってようやくそれらを回収するのは国家責任であるという観念が成立しました。小型武器というのは、  
一人が携帯できる戦争用の殺傷兵器のことで、例えばAK47とかカラシニコフとか、地对空ミサイルなんかも  
小型武器に入ります。自動機関銃、あるいは地对空ミサイルなども小さいですから、政府も回収しきれなくて  
戦後もそこに残って、戦争が終わっても戦争に起因した戦争関連死は続くという状況をうみだすのです。そ  
ういう武器がたくさんあれば戦争は終わっているけれども、何か問題が起きたときに、「なんとしても非暴力的に

それを解決するんだ」という勢いになりにくい場合があります。ですから何としても、非合法に散乱している、そこらに蓄積している小型武器全部を回収、破壊しなければならないと思います。そして地雷は全部除去しなければならないと。

オタワ条約では、地雷を加入後10年で除去することが国際責任となっているわけですから、新しい国際法上の哲学を打ち立てているわけです。今まで政府は必ずしも回収するという責任を感じていなかった通常兵器の中の最も小さなものについても、完全回収責任があるという事を哲学的に原則として打ち立てているわけです。

さて、ここで手段としてそういうのものが、ある程度監理できたとします。でも戦争が再発する可能性はまだ多いです。なぜかという、その「和解のプロセス」に失敗している場合が多いからです。戦争というのは、昔は国家間の政府代表同士が和平協定を結び、調印式を華やかにやって、これからは戦後である、これで戦火が終わるといふふうになっていました。ところが、今日はこれをやっても戦争が終わらないわけです。それは、今日の戦争の特徴は“Deep-rooted Conflict (ディーブルーテッド・コンフリクト)” といって、「根の深い戦争」だからです。民族対立、宗教対立といった長い深い憎悪の念がコミュニティにまで沈殿しているという意味でディーブルーテッドなのです。そういうものを解決するには、どうしたらいいのかということです。必ずしも、政府代表同士が講和条約を結んで戦争が終わるといふことにはならないから、それと同時にやらなければならないことがあるということです。それが「和解のプロセス」を立ち上げていく、和解に導いていくということです。とても難しいことですが、その努力をするということです。世界で成功した例はものすごく少ないです。例えば、国家間交渉ではないですが、南アフリカにおいて長い間黒人と白人の人種的な対立、そこにおける深い、深い傷つきがありました。それをついに乗り越えた方法は、“Truth and Reconciliation Committee (真実と和解の委員会)” というものを設立して和解に導いたというケースです。何故この例を出したのかということ、「和解には何が必要か」ということ、これが答えとして重要だと思うのです。皆さんがもし、喧嘩して、非常に傷ついた、その相手と仲直りしなくてはならないとしたら、何が必要ですか。謝ってもらうこと、申し訳なかった、悪かったと言ってもらうこと。それだけではないのです。この南アフリカの“Truth and Reconciliation Committee (TRC)” という名前の中に答えはあるのです。今この「TRC方式」が国際社会で議論されています。「TRC方式」、あるいはそれに準じたような方式（「TRC-like方式」）を導入すると、戦争の再発を防ぐことができるのです。

「真実」を見つめるということが、和解への最も根本的なスタートとなります。だから真実を、どんなに辛くても見つめていこうということが重要です。そういうことを政府間レベルでも、いろんな社会的なセクター同士でも、最後にはコミュニティレベルでもやる。そしてもし、軍縮のプログラムを、和解を促進するために設計できれば、この「軍縮」と「和解のプロセス」という二つの要素がつながるから素晴らしいものになるのです。日本政府が音頭をとってやっていることですが、小型武器の回収、破壊事業においてはそのコミュニティに集合的なインセンティブ（動機）を与えます。例えば、1000丁の小型武器を回収できたら、子ども病院をプレゼントする、するとそれがコミュニティを定義することにもなるし、それをもって和解のプロセスが始まることもあるのです。地雷においても、コミュニティをあげて除去する運動を和解の政治的なプロセスとして認識できれば、コミュニティに深く入り込んでいる対立の観念を緩和していけるでしょう。なくすことはできないが緩和していく。どこかで許す気持ちというものを見出すことができるかもしれない。許す気持ちというのは、相手が完全に真実を認めた時に生まれます。お互いが真実を見つめることができるよう、国際的な助けができるかもしれない。これが、「TRC-like方式」という国連でも採用し始めている考え方です。そして、コミュニティに至るまでの和解のプロセスが成立したら、二度とその社会は戦争に舞い戻らない、これが最終的な解決です。

日本は戦後、自らを完全に軍縮しましたが、その精神が今日にまで維持されている。実体においていろいろ議論はありますが、精神は維持されている。日本は地雷を完全に廃棄するということをやりました。その式典には総理大臣が来ました。そういう国は他にはない。断言してしまってもいけないかもしれないけれど、私の知っている限りではないのです。私は昨年2月、小泉首相がここで式典に参加されたことを、バンコクでも

その他の常設委員会の場でも必ず報告してきましたが、総理大臣とあれだけの国会議員が来たということは、みんなの驚きとして受け止められました。ですから戦後、これだけの歳月が経って、完全に軍縮をするという国の考え方が実体的にはいろいろ変わってきているかもしれませんが、その精神はそういうところに見えてくるのです。そして、日本は様々なことで和解を心がけ、永久平和の国となる決意をしていますし、またこの日本から、永久平和がアジア全体におよぶことを日本外交の課題としているのだと思います。そのために様々な形で協議を続けなければならないですが、あきらめずにやっていくべきだと思うのです。

そういう大きな流れの中にあって、私たちにはそれぞれ課題がたくさんあります。やはりすべてのスタートラインは自分が経験している小さな世界を超えて、きちっと想像する力をつけることです。抽象的に物事を考える力が人に宿るかということ私は今、教育の現場で追求しています。みなさんと今日この時間をともにして、一緒に様々な事を考えましたが、みなさんも自分の今日考えたこと、感じたことをきっかけに、見たことも、聞いたこともないことについても、想像力を広げて、その時代に何らかの形で対応できるだけの自我を築くための自分の育て方を考えてください。そうすればきっとみなさんの世代には、もう少しよい世界になるかもしれないし、その日まで力強くみんなで生き抜きたいと思います。では、あと皆さんの質問を受けたいと思います。

質問者1：猪口さんは軍縮大使の任期を終えられたとき、引き続き続けようと思われなかったのですか？

先程もお伝えしましたように、一人の人の任期とか、一人の人の立場とか、そういうことで解決できる問題ではないのです。続けていく事が重要です。

自分だけでなく、みんなと一緒に、たくさんの人とネットワークをもって。独り相撲ではだめなんです。だからむしろ、みんなと一緒にやっていくという機会をたくさんの人が持つことが重要です。軍縮の問題というのは、私にとってのライフワークですから、どういう立場であっても、この問題に取り組んでいきます。一人の大使の任期中に何かを解決するということを考えれば、その人は永久にやっていないといけなくなるから、そのような問題ではないのです。ものすごく問題が大きく深いから、あと3年やって、あと5年やって、10年、20年やっても問題は解決しないと思います。ですから、自分のライフタイムを通じて何をやってもその問題を取り扱うという勢いの方が結局は効果をもつかもしれません。逆にいえば大使だけが軍縮の仕事をしているのではないということです。いろんな人が軍縮の成果をあげようとしているから、もちろん軍縮大使として議長をやって今お伝えしたようなことを通信することはとても意義があることだと思うのです。それは、日本の外交の中で今後は継承されていきます。そういうふうには人間社会は発展してゆきます。継承していかなければ発展はないのです。

質問者2：先生、ありがとうございました。本当に素晴らしいご報告をいただいて。私、自分でいろいろやってまいりまして、原色押し花の方面から先生のおっしゃっている通りに、自分でやってきたと思うのです。まだまだ足りませんが、で、絵本を作りまして、「アフガンの子どもたち」ということを原色押し花という作品で、作り上げてきました。それをドラマ化しながら、皆と一緒に考えていこう、子どもも大人も一緒になって考えていただきたいということで作りました。私は2年前にその作品を作りまして、その頃はアフガンのことがしょっちゅうテレビで映っておりましたので、それを中心に考えました。今日、先生のいろいろな実例のお話を聞いて、今日のお話を聞いた後だったら、この絵本は「全世界の子どもたち」というふうにとらえることができると思います。先生、ありがとうございました。私自身先生がお話になった「自分で満足できるか」というところが非常に参考になりました。ありがとうございました。これからもがんばります。

今の話本当にありがとうございました。今まさに、非常に具体的事例から始まって、一時間の話を聞いて、大きなイメージが出来てきたという事例です。どういうふうには人間がイメージをするのか、何らかのヒントによって発達するのかという事例を示してくれました。私としては、うれしいコメントでした。

世界各地から同じような取り組みを、日本の支援でやってもらいたいという願い、要望が寄せられています。例えば、先程申し上げた小型武器の回収事業です。子ども病院とか、保健所とか、小学校とか。やはり最大の被害者は子どもたちですから、子どもが裨益するようなソーシャル・インセンティブ（社会的な動機）をバックしてあげるわけです。そういう話をしたら、アフリカの諸国から「日本はアジアの国だから当然アジアの国についてまずは大事に取り組もうとするのはわかるが、でも被害は同じだから、アフリカもやってください。」とよく言われました。ですからまずは自分の地元によりよい時代を作っていくというのが責任としてあると思いますが、アフリカも、ボスニアも地雷の被害を受けているところがたくさんありますので、そのウイングを広げていくということもみんなでやって行きたいと思います。そいで、何かきつけをつかむというのはとても重要なものです。アフガンがきっかけだったら、それが自分の原点だから、そういう具象のものをしっかりもっている人はやはり強いのです。抽象化するプロセスを辿る時には、ですから、自分はこの国のことから、国際社会を見たのだな、というそのことを大事にして取り組んでいったらいいと思います。でないと、ふわふわとした意味のないグローバリゼーションになってしまいます。さっきも言ったローカルのことが重要というのは知的な世界でも自分がある問題にきっかけをもった「この国」とか、「この人」とかそういうのを大事にして、そこからイメージーションは伸びるのだよということです。

**質問者3：**アメリカのような国にもオタワ条約に加盟してもらうためにはどうすればよいと思われませんか。

まず、アメリカは世界の地雷除去を最も広範にやっている国です。地雷除去というのが大事だと、そして人道支援を条約に入らないでやっているのです。ですから、世界で一番数多く地雷除去をしている国はどこかというアメリカです。そういう国に対して何とか働きかけを続けましょう。締約国会議にはアメリカあるいは、その他の主要な国で地雷条約に入っていない国がオブザーバーとして来ていました。その国は最初後ろの方に座っていましたが、私の常設委員会になった時には前の方に来て座ってくれた。その支えも評価するのです。一步一步小さな努力をしている事を評価しないといけないのです。お互いに批判するだけではだめです。小さな努力もちゃんと称えていく。これがマルチラテラリズムのやり方です。

**質問者4：**ウガンダで軍縮と和解というのはどうやったら成功すると思われませんか。

軍縮については、小型武器についての議定書が成功しました。東アフリカと対抗地域で4月に成功したのですが、その閣僚会議に私は国連議長として出ていました。やはり武器が氾濫しているということであれば、和解はやりにくいから、まずはそのツールが監理されるということで、ひとつ希望をもつことができます。和解については真実を見つめるというプロセスをウガンダで何とかはじめるように、そしてこの新旭町に訪れたこの方が、その最初の人となってくれるようお願いしたいと思います。